

多摩デポ通信 第36号

特定非営利活動法人共同保存図書館・多摩

2015年11月4日発行

〒182-0011 調布市深大寺北町一・三一・一八

●HP / <http://www.tamadepo.org/>

●E-Mail depo_tama@yahoo.co.jp

黒子恒夫顧問が 一病気で逝去されました

「多摩デポ」顧問で、母体の「多摩地域の図書館をむすび育てる会」代表だった黒子恒夫さんが肺炎後に併発された多臓器不全で8月1日にご逝去されました。



理事会は残念ながらご意見を伺うことが出来なくなりました。

黒子さんは1975年から94年まで、(今は田無市と合併し西東京市となった)保谷市の初代図書館長を勤められました。都立多摩図書館の機能縮小や蔵書の大量廃棄が起こった時、後輩や市民が主催した集会で「すべて役所任せにはいけない」「もう一度住民が参加して図書館の仕組みを考えよう」と話されました。館長会が一括で引き取った5万冊の重複調査などの作業にも、率先して参加されていたものでした。

第24回 多摩デポ講座

一橋大学経済研究所資料室・ 附属社会科学統計情報研究センター 資料室&一橋大学附属図書館見学会

12月14日(月) 午前10時~12時

集合：JR中央線国立駅・改札前 午前9時40分(厳守)

「1940年4月1日に東京商科大学東亜経済研究所として創設され、1949年に一橋大学経済研究所に改組された伝統ある組織」(経済研究所HPより)である一橋大学経済研究所資料室と、関連の2施設を見学します。貴重な資料がたくさん!

参加費：無料 定員：20人(申し込み順)

※今回は見学場所の都合で人数限定、要事前申込です
申し込みはメールかFAX、12月10日(木)までに多摩デポへ

詳しくは
5p記事を
参照

E-Mail : depo_tama@yahoo.co.jp FAX : 042-484-3945

黒子恒夫さんを偲ぶ

理事長 座間直壯

去る8月1日(土)に多摩デポの顧問をされていた黒子恒夫さんが肺炎のため81歳の生涯を閉じられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

前号の「多摩デポ通信35号」(8月1日発行)に、今期も顧問をお引き受けいただきました。という記事を掲載し広報した直後のご逝去でした。黒子さんの顧問継続は、5月17日の年度総会後の理事会で承認を受け、すぐにお願いの電話をいただきました。その時はお元氣の様子で「お役に立てるかどうかわからないが承知しました」と快諾していただきました。その後わずか2か月の訃報に、全く信じられない思いでした。

9月10日多摩デポを代表

して、数人でご自宅に弔問に伺いました。黒子さんの部屋には整理された蔵書が並んでおり、中でもご自身が製本した図書が何冊もあつて、本を大事にされていたお人柄を偲ばせる光景が印象的でした。

お訪ねした際に出迎えていただいたのは、黒子さんの奥様と息子さんでした。奥様はお元氣の様子でなによりでした。黒子さんの亡くなられた経過は息子さんから丁寧なお話をいただきました。発端は7月中旬頃に肺炎で緊急入院したのですが、治療の甲斐なく3週間後に息を引き取られたということでした。故人の遺志で葬儀は行わず、ご遺体も大病院に献体されたとのことでした。

思い起こせば、私と黒子さんとの出会いは黒子さんが保谷市立図書館長になられて調布市の図書館にご挨拶に見えたのが最初でした。黒子さんは川崎市の図書館などを経験されていましたが、当時の多摩地域は、東京都の図書館振興政策にからむ補助金で図書館建設ラッシュを迎えていました。保谷市もその中の一つかと思いますが、その図書館創設に招かれて着任したとのことでした。その時に、正確には憶えていませんが、中国の大連で生まれことや北海道での新聞記者の経験などのお話を、私の上司である萩原祥三館長と一緒に伺いました。今思い出しています。小柄なお身体からは到底想像できないパワーが漲り、圧倒されながらご自身の図書館への熱い想いを聞いたことが大変印象に残っています。

図書館退職後の活動として「多摩地域の図書館をむすび育てる会」(多摩むすび)では代表をつとめられ、

現役職員達のリーダーとして図書館の資料保存の活動を続けてこられました。この活動を引き継いだ「共同保存図書館・多摩」(多摩デポ)では顧問として活動を支えていただきました。

これらの活動をとおして黒子さんが常々口にされていた言葉があります。それは「いまなにをなすべきか」という言葉です。それぞれの置かれた立場で、それぞれが考えなければならぬ含蓄のある言葉として私は受け止めていました。

8年目を迎える「多摩デポ」の活動についても黒子さんのことばを胸にしつかりと歩みをすすめていきたいと思えます。

謹んで哀悼の意を表するとともに、こころよりご冥福をお祈り申し上げます。



黒子恒夫さんと 思想の科学・市民学校

山領健二（会員）

黒子さんが思想の科学研究会で私たちとの交流・協力がはじまったのは1960年代の半ば、半世紀を越えて熱心な会員として会の活動に関わって来られた。

『思想の科学』という雑誌に最初に執筆されたのは1965年5月、「集団の会」という研究サークルの紹介記事である。敗戦後の日本で全国各地に生まれた小さいサークルの一端を調べて記録し、そこから戦後の思想を考察しようという目的で鶴見俊輔氏・大沢真一郎氏らの主導で発足したこの研究会は、次々と参加する気力に充ちた若い会員たちを加えて、月2回のペーシスの研究報告会を続け、1975年にはその成果を

六百余頁の『共同研究・集団―サークルの戦後思想史』（平凡社・刊）という大冊に結実させた。黒子さんの執筆された「鎌倉アカデミア」もこの本に収録されている。

しかし、黒子さんは「集団の会」だけでなく、もう一つ、当時の思想の科学研究会が新しい活動体として創設していた「市民学校」の聴講する学生としても積極的な活動を始めていた。

◆ 今年の8月初頭、思想の科学事務局からの電話で黒子さんの急逝を知った時、最初に頭をよぎったのは黒子さんから預かった手作りの本のことであった。「研究会用」―として手渡されていたことを、あらためて思い起こした。三年前の思想の科学研究会の年次総会で私を見つけた黒子さんは、車付きのスーツケースを開

いて花柄の布で装丁された本を取り出した。『思想の科学研究会・市民学校 沿革』と題された一冊。かつて思想の科学研究会が企画し、東京だけでなく各地で開設・活動した「市民学校」という活動体の記録を保存して来た黒子さんが整理、複写、編集、そして自身の手で製本した資料集である。

◆ 思い返せば、黒子さんが思想の科学研究会の活動に参加したのは市民学校の開設と同じ時期だった。この手作りの資料集の巻末に複写されている、聴講者記名入りの聴講券（参加証）の開講日は1963年の10月4日、四週通しの授業で、担当講師は中国文学者竹内好氏、講義の主題は「日本と中国」であった。この主題は、中国東北で生まれ、敗戦までの戦時期をその地で生活した黒子さんにとつ

て、見過せない授業であったと思われる。

市民学校が聴講生に対して何を期待していたかも、黒子さんの資料集の中に資料がある。

「講師は自分の考えている学問の体系を、妥協なく学生にぶつけます。学生は時間の許すかぎり、講師に喰い下がってみずからの生活体験をおして講師の体系を打ちこわしつくりかえます。そういう力いっぱい勉強の場をつくり出しましょう。」

◆ 敗戦時の引揚生活経験の後、学校教育を1959年までに終えると、黒子さんは新聞社から職業体験を始めていた。

北海道の支社の記者として札幌市役所を担当、1960年安保闘争を当時の労働組合員として体験した後、東京に戻る。市民学校と

の出会いには川崎市の公務員に就職後間もない時期のことであった。市民学校は恐らく黒子さんの期待を裏切らなかつたのだろう。



60年代に各地に拡がりながら持続されたこの学校の運営に、黒子さんは協力して常任の委員を引き受けただけでなく、その記憶を持ち続け、その記録、資料の保存を持続した。開校から半世紀近くを経た2010年、黒子さんと同じく開校当時の学生で運営の推進力であった古い友人吉田邦雄の訃報に接した時、黒子さんは『思想の科学会報』に深い弔意を記している。

「吉田邦雄さんは、市民学校での自分の記録を残さずこの世を去り、そのことを知った私はおもいもかけず昨年晦日近く私の手許に残っていた資料の断片で、研究会の若い人たちに市民学校の経緯〓吉田さんの足跡を話す機会を得て彼の冥福を祈った次第です。」

◆ 文中の黒子さんの講義が行われたのは2009年の年末で、黒子さんは生き生きと昔日の市民学校を語られた。しかしこのころすでに黒子さんは闘病中であった。毎年恒例のアンケート方式で会報が掲載する会員の近況報告でも、黒子さんの近況は明暗の両面が生まれて、私たちは心配になっていた。

◆ 毎年の会員総会にも必ず出席されていたが、資料を入れたスーツケースを杖代

わりに定刻にバスを乗り継いで来られ会議が終わるとまた急ぎ足で帰宅される黒子さんの様子は、毅然としていて時候の挨拶や無駄な噂話などを許さなかつた。車を呼ぶなどという発想も許されない中で、せめてバス停まで、殆ど話もせず公道を急ぎ、バスがくるまでの短い時間を昔からの黒子さんと共にするという数年が続いたように思う。

◆ 思想の科学研究会には、さまざまな生活関心と研究領域の交流の中で誕生した少数数の研究サークルがある。2009年に黒子さんを招いて市民学校の話をお願いしたのは「サークル戦後史研究会」というサークルだった。この「戦後史サークル研究会」での数時間が、私たちにとって最後の講義となった。

黒子恒夫さんは、多摩に図書館人として登場する以前から続けておられる活動がありました。その頃からのことを、山領健二さんに書いていただきました。

『公共図書館の蔵書構築と共同保存事業―各館書庫からの除籍をどのように進めていくか?』 堀 渡

『情報の科学と技術』9月号「コレクション構築の現在」特集に依頼され、理事が執筆したものです。抜き刷りを同封しました。お読みください。

多摩デポ講座の 少し詳しい案内

一橋大学経済研究所資料
室など三施設を一度に見
学する欲張った企画です

「経済研究所は1940
年4月1日に東京商科大学
東亜経済研究所として創設
され、49年に一橋大学経済
研究所に改組された伝統あ
る組織です。研究所の設立
目的には『日本及び世界の
経済の総合研究』を行うこ
とが掲げられて」おり、多
くの成果を上げているそう
です（経済研究所HP）。

経済研究所資料室では、
海外の統計資料、外国雑誌
を収集し、研究所の収集す
る日本経済に関する研究
書・各種統計書は、主に附
属社会科学統計情報研究セ
ンター資料室に収められて
いるとのこと。

「社会科学統計情報研究
センターは、社会科学統計
に関する情報を網羅的に収
集整備し、学術研究者に広
く提供することにより、日
本経済を中心とする人文・
社会科学研究の向上に寄与
することを目的としてい
る（同研究センターHP）。

さらに「附属図書館は、
商法講習所以来130年を
経た歴史の中で、社会科学
を中心とし」た貴重なコレ
クションの蓄積が特徴との
こと（附属図書館HP）。

HPの施設紹介から引用
しましたが、「百聞は一見に
如かず」です。

ちようどこの時期、都留
重人メモリアルコーナーで
は、戦後70年記念企画展示
「都留重人の戦争」の後期
展示をやっている時で、都
留重人氏の前半生を偲ぶこ
ともできます。

都留重人氏「1912～
2006」は米国ハーバ

ード大学卒業後、同校の講師
を務め、戦時下の1942
年に日米交換船で帰国しま
した（今年7月亡くなられ
た、鶴見俊輔氏と同乗です）。
戦後1947年に第1回の
経済白書を執筆。その後は
一橋大学学長など各大学の
学長・教授を歴任、都市問
題や公害問題などにも積極
的に取り組みました。都留
氏の業績の一端に触れるだ
けでも、意義ある見学会に
なるはずですよ。

この機会に一橋大学にご
一緒しませんか。



図書館総合展（横浜）
スピーカーズコーナーにて
話します。お時間がありまし
たらお寄りください。

11月11日（水）
午前11時15分～12時

「公立図書館の資料保存と
除籍を考える」

戦後の図書館を変えた『市民
の図書館』が発行されて45年が
経ちます。図書館は全国に普及
し、各館で蔵書は蓄積されてき
ました。既にどこも書庫は一杯
で、除籍しながらの新規受入が
常態化しています。資料提供を
担保しながら、ある資料を除籍
しある資料は保存する。そこを
適切に切り開くことが、公立図
書館の次のステージを拓く課題
だと考えます。

県と区市町村が連携し、広域
図書館行政を構築する必要があ
ります。その課題と可能性を考
えます。

多摩デポ理事 堀 渡

(株)カーリルとの
共同研究報告 その4

多摩デポでは昨年から、(株)カーリルと共同研究を行っていきます。

ある自治体の図書館で除籍候補となった資料が多摩地域全体ではまだ何冊残っているのか。最後の2冊、1冊になっていないか。各館で容易に確認できるシステム作りを進めています。カーリルはこの仕組みをほぼ作り上げました。しかし実用のためには仕組みの精度が問題になります。

今回、ある図書館に協力してもらい除籍資料約550冊のデータを提供していただきました。このデータを使い、カーリルのシステムで出した結果と、都立図書館が運用している「統合検索」を手入力で調べた結果を比較する、精度調査を

行いました。

大半は同じ結果が得られましたが幾つかの問題点も見えてきました。

今回照合した資料は、ISBN(国際標準図書番号)が付与された資料に限られます。二つの検索方法で違う結果が出たタイトルは、その図書館のOPAC(オンライン利用者用目録)で再度検索したり、書名などでも調べました。

各館のOPACから直接取ったデータを使っているカーリルの結果と「統合検索」の結果が違う場合があるのです。「統合検索」では実は所蔵データが出てこない場合があります。そのケースを個々に検証しました。その結果、幾つかの原因が分かってきました。例えばISBNには古い10桁コードと新しい13桁コードがあります。その入力に適切でなく、うまく「統合検

索」で拾えない図書館があります。長期延滞中の資料データを公開しているかないかでも違いが出てきました。1980年代以前の発行物にISBNを後から付与した場合、書誌間違いを起こしていた場合もありました。これ以外に、コンピュータシステムを更新した直後の図書館では、システムが不安定で「統合検索」に対応しきれない場合もあるようです。

カーリルシステムのエラーも見つかりました。ある館で同一書誌が書誌別れている場合(同一書誌が一般と児童に分かれて所蔵されているような場合)、システム上認識していない場合があります。カーリルで改善を図っています。

カーリル側では対応できない図書館自体の問題もありますが、分かってきた問題を図書館と共有すること

でより精度の高いシステムを構築することが可能だと思えます。

ISBNが付与された資料の管理は、このシステムで処理できる見通しが見えました。今後多摩デポでは、ISBNが付与されていない古い資料の処理方法も大きな課題として検討を進めていきます。



第23回多摩デポ講座

「多摩で35年間、出版社をやってきた——地域に根ざした出版活動について聞く」

講師：清水定氏

(けやき出版会長)

去る9月29日(火)午後7時から立川市の柴崎学習館の第一視聴覚室で、清水定氏を講師に多摩デポ講座を開催しました。

参加者は19名で多くはありませんでした。「長年けやき出版をやったこられた清水氏のお話」という企画ゆえの参加者が来られました。ただし、現役の図書館職員は参加がありませんでした。

大変長く社長を勤められ、ご苦慮の末、若い世代の社長に交替を果たしたばかりとのタイミングで、意義のある講演会となりました。



☆ 参加者感想 ☆

清水氏のお話を聴いて

麓 常夫(会員)

多摩地域の小出版社「けやき出版」の名前は、雑誌『多摩ら・び』を読んで知り、その後も何冊かは、書店で見かけるといわば衝動的に買ってしまい、古書店へ処分することもなく、今でも手元に残っています。清水定氏の話聴いて、興奮さめやらぬうちに、依頼された感想文を書こうと、

久しぶりに原稿を書き始めると、我が家の書棚に並べてあった『多摩ら・び』のバックナンバーが目にはいり、思わず手をのぼしてしまいました。ページをめくっていくうちに、清水会長のお顔と声がよみがえり、原稿を書く手が止まってしまいました。

また、近くの棚をみてみると、今回の話の中に出てきた『多摩の低山』と、このシリーズの他の二冊『秩父の低山』『相模の低山』をみつけたので、これも取り出してしまい、この本は、『多摩の低山』は書店で買ったが、古書店で手に入れたことを思い出し、感慨にふけてしまいました。

さらに、けやき出版の本を探していたら、今尾恵介著『地図の遊び方』、同著『多摩の鉄道沿線古今御案内』、『高尾山の花』、『高尾山四

季探訪』など次々と出てきて、原稿書きどころではなくなり、しばし中断となつてしまいました。

午後は、用事で外出した際、近くの書店に立ち寄り、『たまら・び』10月号を買うつもりでしたが、あいにくまだ店頭に出でおらず、新刊書棚にあった今尾恵介著『地図でたどる多摩の街道』を買って帰宅し、さっそく読み始めてしまい、まだ原稿はストップしたまま、一日が過ぎてしまいました。

このまま書き続けると、依頼された「感想」ではなくなってしまう恐れがあるので、気をとりなおして、感想を述べます。

今回の講演で印象深かったところは、けやき出版発足当初から、採算がとれなくとも歴史的に残すべき資料を発掘し、刊行すること、そして、読者が読みたいと思われる本を充分の取材を

して、発行すること、この二つのことが出版社の社会的役割であることを明確に示し、実行してきたことにあると思いました。

もう一つ印象的だったのは、こうした出版事業を続けて行くためには、これに携わる社員を大切にすることでした。出版事業の基本は、会社はまず社員のためにあること。当然のことながら、社内では、仕事上の男女の差はなく、また、後で聞いた話によると、仕事は手際よく進め、午後6時頃には終え、残業はないとのことでした。結局、こうした社内環境を良くすることによって、出版する際の大切な本の書き手である著者の発掘、また、多摩地域の情報を得るための取材にエネルギーを十分に発揮することが出来るのではないのでしょうか。

けやき出版創業35周年の

年に、第四代社長であった清水氏に代わって若い社長が就任しました。これからも多摩地域に関する情報をもり込んだ本、そして、歴史的に残すべき資料としての本を継続して刊行していただきたいと思えます。一読者として、気に入った本はできるだけ買うように努めたいと思えます。それもネット販売ではなく、地元書店で本を手にとってから買うことにします。

そして、公立図書館へのお願ひ。けやき出版に限られません。けやき出版が心血を注いで刊行した本、それが一般読者むけであれ、歴史的資料であれ、一旦受け入れた本は、除籍処分とせず、現在と未来の利用者のために長く保存していただきたい。

出版社として売れ残った本は断裁されるそうですが、けやき出版発足時の大型企

画『この悲しみをくり返さない 立川空襲の記録』（全3巻）は断裁するに忍びなく、在庫を希望者に無料で配った話には感動を覚えました。

●親子で初参加の方があり、一言ずつ感想を――

（息子）出版関係に興味があり参加しました。自分が思っている以上に大変だということが分かりました。

（母）出版関係に進みたいという高校生の息子を「大手の華やかな面ばかり見ているのでは。」と気にしていたところにご案内を戴き、参加しました。実感のこもったお話に、改めて大変さを感じる一方、「地域の出版社」であることが大切に思っていることがよく分かりました。これからも「思いの詰まった」本を出版し続けて下さい。

★会の現勢

2015年11月1日

現在

●会員

（個人会員94名）
（団体会員3団体）

●賛助会員

（個人41名）
（団体1団体）

会の活動はみなさまの会費・ご寄付で支えられています。会費の納入がまだの方はお早く振り込んでいただけますよう、よろしく願ひします。

●年会費

正会員（個人・団体）
五千元

賛助会員一口 二千元
（個人一口団体五口以上）